



五木寛之

青春の門

望郷篇

上

講談社

青春の門 第五部 望郷篇 上 八九〇円

著 者 五木寛之

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一
〒一一二 振替 東京八―三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一一(大代表)

印刷所 豊国オフセット株式会社

製本所 株式会社大進堂



第一刷発行 昭和五十四年七月三十日

©五木寛之 一九七九年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

織江の旅

春の迷路

帰りなん、いざ

竜五郎病む

デッド・ロック

起死回生の道

骨嚙みの日

さらば香春岳

303 265 221 173 135 102 70 5

表紙絵

さしえ

風間

完

題字

菅 甘林

装幀

村山豊夫

青春の門

望郷篇

上

織江の旅

楽屋とは名ばかりの、薄汚れたせまい部屋だった。普段はこの店のホステスたちが更衣室として使っている場所なのだろう。そこにカーテンで仕切られた二畳ほどの空間をしつらえて、ゲスト出演する歌手やコメディアンの控え室のかわりに利用しているのだ。

客席の嬌声や、呼出しのマイクの音、クラッカーのはじける響きなどが一斉に流れ込んできた。壁のベニヤ板にピンでとめられたヌード写真が、今にも落ちそうに震えている。誰が生けたのか、牛乳びんに白いマーガレットが一輪、場違いな感じで揺れていた。

こうした地方都市のキャバレーの裏側は、どこでもこんなものだった。中には立派なステージや楽屋をそろえた店もないではないが、そんな一流店に出演できるのは、中央でも名の通ったスターたちに限られている。駆け出しの無名歌手にとっては、仕事の場所にあれこれ条件をつけたりすることな

ど、考えられないことなのだ。

織江は鏡の前に、ぼんやり自分の顔をみつめて坐っていた。つけまつ毛をつけ、アイラインを引き、鮮かな口紅を塗った女の顔——。耳たぶの金色のイアリングが、裸電球の下でわびしげに光っている。

水色の薄いドレスから肩と乳房の上半分がむき出しになって、その部分だけは隠せぬ若さの張りとき光沢をおびて白く輝いて見えた。だがドレスの下のは、一年前の織江からは想像もつかないほどすんなりと華奢な感じに変わってしまったている。

へ——七キロは痩せたかしら？

織江は自分の腰のあたりに手をやって思った。ずいぶん無理な減食もしたのだ。朝晩の体操は今でも欠かしたことがない。信介と一緒に北海道から東京へもどってきて、研究生として井原プロにはいることが決まった当時は、五十キロ以上あったはずだった。

へよう肥えとるのう、この新人は。女中がわりに働かせるんなら、もってこいの子やないか

と、はじめて井原プロの社長という男に会った時に言われた言葉を、織江は今でも忘れてはいない。カッと体が火照って、よし、それなら、と唇を噛んだまま心の中で誓ったのだ。

へあれから一年——

織江は鏡にうつる自分の顔を眺め、きょうまでの日々を走馬燈のように思いおこしていた。

井原プロから作曲家の所へ住込みの内弟子としてあずけられてからの半年間は、織江にとって決し



て楽な暮らしではなかった。

内弟子といえは聞こえがいいが、実際には住込みの手伝いである。近代歌謡研究所と、名前だけはいかめしくとも、要するに作曲家が本職の片手間に、歌手志望の若者たちにレッスンをしてやる私塾のようなものだ。その教室の掃除から、庭の手入れ、犬の世話や、子守り、洗濯、それに買物など、ほとんど家事一切を見なければならぬ。時には先生と呼ばれる作曲家の肩をもんだり、来客の車のガラス拭きまでやらされることもある。

彼女自身のレッスンといえは、最初の頃は発声練習のようなことも一応はやらされたが、今では週に一度、ほんのお義理程度に先生のピアノに合わせて古い歌謡曲を五、六曲歌わせられるだけだった。へ流行歌の歌い手は、芸術家じゃない。しょせんは芸人だ。芸人ってのは泣きが入ってなけりゃ駄目だ。とことん苦勞して、人生の裏表をじっくり体で受けとめた人間だけが一人前の歌い手になれる。音程やリズム感だけで艶歌がうたえると思つてると大間違いだぞ。

作曲家は口ぐせのように織江にそう言うのだった。

へそんな古くさいこと——

と、織江は心の中で反抗しながらも、自分のおかれている立場を考えると、素直にそれにしたがうしかなかった。時には、こんなことなら札幌へもう一度帰ろうか、と考えることもあった。

だが、その作曲家の家に住み込まれていた半年の間に、織江には少しずつ歌うことへの執着のようなもの芽生えつつあったらしい。

彼女は子供の頃から歌が好きだった。小学生の時、NHKのラジオのへど自慢大会が飯塚の街

から中継されたことがあって、それに出場したくてたまらず、ひとりで田川の町から峠を越えて飯塚まで歩いて出かけたことがある。幼い彼女は、その大会に出場するためには、前もって申込んで予選に出る必要があることを知らなかったのだった。その時は結局、がっかりして夜の峠道をまた歩いて帰ってきたのだ。大人でも怖がる者のいる夜の山中の旧道を、知っている歌を次から次へと大声でうたいながら、無我夢中で駆けるように降りてきたあの晩のことを、織江は今でもときどき思い出しては苦笑することがあった。

札幌の街で井原プロの男に歌をやってみないかとすすめられたとき、正直なところ織江には、その話はかなりうさん臭いもののように思われた。

そんなに簡単にことが運ぶのなら、世間は甘いものだ、という気がした。ここは一つ、冗談として聞き流すのが常識だろうとも考えた。

だが、当時の織江にはそのこととは別に、信介との生活をどうするかという問題があった。

彼女が酒場で働いて二人の生活を支えながら、札幌の街で暮らすことは、むずかしいことではない。二人だけの平和な生活に、織江は決して不満ではなかった。夜の仕事もさして苦にはならなかった。もともと九州出身の女の気質には、人びとの間で陽気に立ち働くことへの適性のようなものがあって、織江も持前の楽天的な気性から、酔客の機嫌をとりむすぶ商売にそれほどの抵抗感はなかったのである。

だが、問題は信介のほうにあった。彼は織江と二人だけの平穏な札幌での生活に満足していないようだった。彼はもっと激しい、もっと活気に満ちた、危険な未来へのうずくような情熱に心を灼かれ

ているように見えた。

それを彼が口に出さずとも、織江にはわかった。信介は男だった。そして若かった。愛する女と二人で北の街にひっそりと生きるだけでは、彼はどうしても満足できないでいるはずだった。

そんな彼のあせりを、織江は痛いように皮膚で感じながら暮らしていたのである。

〈何とかしなくてはいけない〉

そう思いながら、それでもどうすればいいのか、彼女にははっきりした方法がわからなかったのだ。井原プロの男から歌をやらなかと誘いがあったのは、丁度そういう時期だった。そして、信介はひそかに上京の計画を心に決めていたらしかった。

〈この話を利用して一緒に上京しよう〉

織江はそう考えた。信介はもう一度大学へもどるために上京する。自分は歌手になるためにスカウトされて東京へ行く。

織江は井原プロの話を全面的に信用してはいなかった。だが、向こうが何を企てているか、そのへんははっきりわからずとも、東京へ行く一つのきっかけにはなる、そう感じたのだった。

彼女は歌手の卵としてスカウトされた時から、それほど甘い期待を抱いていたわけではなかった。そんな織江だったからこそ、住込みの手伝い同様に作曲家の所へあずけられても耐えられたのかもしれない。

このままでも別にかまわない、と彼女は考えていた。たしかに最初の頃はそうだった。

だが、その作曲家の家へ毎日、通ってくる歌手志望の若者たちの姿を眺めているうちに、織江の心

の中にはそれまで眠っていた歌への激しい情熱のようなものが、少しずつ大きくふくらんで来はじめていたのである。

〈ひよっとしたら——〉

と、彼女は考えた。努力と運次第では、もしかすると自分も歌い手の世界に踏み込んで行くことが可能なのではあるまいか。もし、それができたら、信介は大学で、自分は芸能界で、それぞれ競い合ひながら生きて行くこともできる。

織江はやがて本気で歌の勉強をはじめた。勉強といっても、正式に楽典を憶えるようなやり方ではない。一日の仕事が終り、作曲家夫妻も寝静まった深夜、玄関わきに止めてある先生の古い小型乗用車の中で、窓をびったり閉め切って大声で歌うのである。

車の中だと、声が反響して、いつもより巧く歌えるような気がした。深夜、フロントガラスの向この街燈をみつめながら一心に歌っていると、まるで自分が一条のスポットライトを浴びながら舞台に立っているような錯覚をおぼえることがある。

激しい雨の晩、その雨風の音に負けずに声をはりあげて歌っている時など、体の中のもやもや、淋しさや、やり切れなさが曇ったガラスを掌でぬぐうように消えて行くような感じもした。

昼間、レッスンに来た若者たちのために、作曲家があれこれ注意したり、教えたりすることを、織江はこっそりメモに書きとめてしまっておいた。彼女は深夜そのメモを車の中でとり出し、何度も読み返し、練習した。時にはあたりが白みかかる頃まで歌い続けたこともあった。

へこの車の中がわたしのスタジオなのだへ

と、織江は考え、ふと苦笑することがあった。こんなことをくり返して、果して何かの役に立つのだろうか、と感じることもある。

そんな時、織江はどこか別な所で暮らしている信介のことを思い出すのだった。この時間、彼はこの東京の空の下で一体何をしているのだろうか。彼は自分のことを思い出すことがあるのだろうか。これから先、二人はまた一緒に暮らすことができるのだろうか。それとも、このまま別々な道を歩き続けて行くのだろうか。

織江にとって、人びとが寝静まった後の深夜の車の中は、そこだけが彼女にとっての本当に安らげる自由な場所だったのだ。そんなふうにして眠る時間をさいての緊張した生活が流れてゆき、織江は札幌時代の健康な娘とはまるで違った、神経質そうな痩せた少女に変貌して行ったのである。

そんな織江に思いがけない転機が訪れたのは、その作曲家の家に住み込んで半年あまりが過ぎた、ある晩のことだった。

その夜、いつものように家中の片づけものをすませると、織江はみんなが寝静まった後で、玄関わきに止めてある小型乗用車のドアを開けた。

すでに午前一時を過ぎていた。あたりはひっそりと静かで、通里には人影もなかった。

彼女は車のシートに深く腰をおろすと、ぼんやり今日一日のことを考えた。それは同じ雑用のくり返して、思い返してもうんざりすることばかりだった。

彼女は気を取りなおして、車内に持ち込んだ楽譜をひろげ、流れ込んでくる淡い街燈の光の下でそ

れを眺めた。

それは織江の知らない古い戦前の流行歌だった。大手の芸能プロから特別に依頼されて作曲家が指導しているある新人少女歌手のための練習曲である。その歌い手はすでにデビューして、何枚かのレコードも出してはいたが、もう一つのび悩んでいる新人だった。

織江は、その少女歌手の歌を聞いたときから、なぜか強い対抗意識のようなものを覚えた。そして彼女が練習にやってくる度に仕事の手を休めては、ひそかにレッスンをのぞきに行ったりしたものだった。

彼女が手にしている楽譜は、その新人歌手がレッスン室に置いたままにしていたものである。それには、あちこちに色鉛筆で歌い方の注意がメモしてあった。

織江は、夜の車内で、ゆっくりと息を吸い込み、声の調子をととのえた。それから最初は小声で、古い戦前の流行歌を口ずさみはじめた。

へ流れ流れて 落ちゆく先は

と、彼女は歌った。そんなうらぶれた歌詞は、若い織江には淋しすぎる歌のように思えてならなかった。もっと激しい、体ごとぶっつけるような歌のほうが、びったりくるような気もした。

だが、何回もくり返し歌っているうちに、彼女の心の中に、不思議な共鳴がうまれてくるのが感じられた。人生の落魄もくはくをうたったその歌詞には、織江にはわからない人の世の哀しみが沈んでいる。そ

して、その想像もつかない別世界の入口に自分が立って、はるかな終りのない旅へ踏み込んでゆくような錯覚をおぼえるのだ。

織江はやがて歌詞をすっかり憶^{おも}えてしまい、譜面をたたんで目を閉じたまま、くり返し同じ歌をうたった。

「あの人はこんなふうには、歌わなかった」

と、織江は昼間聞いた新人歌手の歌い方を思い返しながら考えた。

「なぜだろう？　なぜ同じ歌をうたってこんなに違うのだろうか？」

新人とはいえ、向こうは少なくともプロである。歌い方も安定していたし、声にも魅力があった。

だが、織江にはひそかに心の中で思っていることがあった。それを考える度に、彼女はふっと怖くなることがある。それは、自分が自分のことを全く勘違いしているのではないか、という怖れだった。

「あの人の歌は死んでいる。それにくらべて、下手でもわたしの歌は、生きている——」

織江はそう感じるのだった。そして、それが独りよがりのうぬぼれかもしれない、と考え、急に恥ずかしくなるのだ。

「でも、わたしにはそう思えるんだもの。しかたがないわ」

彼女は、口の中でつぶやいた。

「わたしの歌には、なにかがある。まだ誰にも気付かれていないなにかが——。ひよっとすると、わたしは本当に歌手になれる人間なのかもしれない」

織江はまだ自分の中にあるそのなにかが一体どういうものなのか、はつきりつかめてはいなかった。